

校区の歴史

母里小学校の校歌に「萌える若草望理の里に」という歌詞があります。これが「母里」という地名の語源なのです。このように母里という名前だけでもドラマがあります。このようなお話を元本校校長で郷土史家の本岡一郎先生にさせていただきました。4年生の社会科「わたしたちの郷土をみつめて」という単元の発展として聞き取り学習をしました。内容はどれも興味深いもので、子どもたちは母里校区について興味・関心、そして郷土のすばらしさに誇りを持ってたことでしょう。内容も冬休みの課題で調べていたことと関連したお話を盛り込んでいただきましたので、さらに深く理解できたのではないのでしょうか。われわれ大人にとっても興味深く感心することばかりで、たいへん勉強になり、充実した時間を過ごすことができました。平成15年1月16日、本岡先生のお話の概要をお知らせいたします。これを読んだらあなたも平成母里校区歴史博士？！

「母里」の名称由来

母里校区で一番早くから人が住み始めたのは草谷（草谷川の流域）で、その頃、南部の大地は荒れ野でした。望理の里という名称は713年「播磨風地井沖」に標記されました。時の天皇が加古川の流れの「曲がり方がきれい」といったことから「まがりのさと」と呼ばれ、後に「もうり」から「もり」、そして母里に変化しました。

入ヶ池伝説、美女お入の正体

644年に藤原弥吉四郎という大和朝廷の役人がこの地に来たとき、ある老人に「この地を開発しなさい。」といわれました。弥吉四郎はいわれるまま開墾し、水があるので池を作ろうとしました。しかし堤を何度作っても雨が降ると切れてしまいます。

714年にその孫の光太衛が「堤防を工夫しなさい。6枚屏風の形にして、そこへ美しい娘が通るから人柱にして…」という夢のお告げを聞き、その通りにするとそれ以後堤が切れることはなく、立派な池が出来上がりました。その池の名前をその美女の名前からって「入ヶ池」としました。

鬼川原谷

738年、こぼと園の少し北（当時北谷）に鬼が現れました。「今はこんな鬼の姿をしていますが、実はお入なのです。わたしの菩提を建てて吊ってください。そうすれば村人も幸せになるでしょう。」そこで入が池から曇川を下った北山の川上真楽寺に薬師堂が建てられました。

※今もこぼと園から高菴寺に向かう途中に字鬼川原谷と呼ばれるところがあるそうです。

経之池とお坊さんのお経

経之池は、母里で一番古く建造された池だそうです。ため池はもともと人によって作られた人工池です。806年、この池の完成を願って多くの僧侶がお経を読んだことからこの池の名前がつけられました。

高菌寺

高菌寺は、今から1350年ほど前(650~654年)に建てられた古いお寺です。

2月には鬼追い式(昔、人々は飢饉や災害があつて、作物ができなくて困っていました。そこで、災害を鬼に見立てて、行うようになった儀式)でにぎわいます。

高菌寺は、1441年、1580年の2回にわたって焼けています。一度目は室町時代、二度目は戦国時代、三木城落城のときです。

落城坂

戦国時代、豊臣秀吉は三木の城主別所長治を攻めました。戦法は兵糧攻めといつてお城の周りを敵が包囲して城内の食料がなくなるまで待つ戦い方です。

別所方は食糧を明石にある魚住の泊などの港からひそかに運んでいました。毛利元就の子、小早川隆景も毛利の軍勢を率いて三木城へ。ところがここ母里の荒内にあるこの坂までやってきたところで「三木のお城がおちた」ことを聞かされます。

隆景はしかたなくその場から引き返しましたが、その時乗っていた馬がくそをたれ、しばらくにおいが残っていたそうです。しかもその後そこを通る馬もそこで用を足したりしていたことから「落城坂、くそたれ坂」と呼ばれるようになったのです。

※教科書や本の中だけの日本史ではなく、生きた歴史がこの母里の地にもしっかりと根づいていることを実感します。1580年、三木城落城の際に高菌寺も焼けることとなります。まさに日本の歴史の渦中にあつたといえます。

野谷の伊左衛門

江戸時代、幕藩の暴政による一揆は数多く起きています。姫路藩も例外ではありませんでした。収穫の6割から7割の年貢をとられます。西は飾磨を中心に、東は野谷の伊左衛門を中心に一揆が起きました。(1749年)

これが寛延の大一揆と呼ばれているものです。目指すところは上西条の大庄屋沼田平九郎。なんと5千人もの農民が集結しました。後に伊左衛門は捕えられ、「はりつけ」の刑に処せられます。伊左衛門は牢獄で死んでしまったにもかかわらず、塩漬けにされ大阪まで運ばれてはりつけの刑に処されたとか…。見せしめのひどい仕打ちであつたことは間違いありません。

※この時代、農民の生活がいかに虐げられていたかがよくわかります。江戸時代の悪政が播州の姫路藩、この母里の地にもしっかり影響していたことがわかります。

播州葡萄園

1880年明治政府の国家プロジェクトの一つとして開園された「播州葡萄園」、印南の地に作られた官営（今の国営）の日本で初めて作られた葡萄園です。1896年には廃園になり「幻の葡萄園」になりましたが、その技術は、日本各地に引き継がれ、日本の葡萄栽培の礎となりました。1996年に圃場整備事業の用地の一角で偶然見つかったレンガ積みの遺構。醸造場跡や園舎跡が見つかり、地下室跡の木箱の中からガラス瓶に入ったワインが見つかりました。思いは遠く明治時代の先人の苦勞と播州葡萄園にかけようとした願いを感じることができた発見でした。

相野飛行場（三木飛行場）

1944年、第2次世界大戦中に草谷相野地区から三木市別所町花尻・石野地区、加古川市八幡町にまたがって陸軍の飛行場が作られました。戦闘機の操縦士を訓練するために作られたものです。建設工事はすべて人力です。奉仕作業時には母里国民学校（小学校）の児童も参加しました。旧制姫路高等学校の学生が勤勞奉仕で母里国民学校（小学校）の講堂に寝泊まりして、飛行場の建設に参加したという記録も残っています。

訓練していた操縦士たちは、休みの日などに地域の人達と交流していたということです。戦争末期には、操縦士の中から特攻隊に選ばれて鹿児島基地から特攻に飛び立たれた方もいます。また、相野飛行場周辺にもアメリカの飛行機が飛んできて機銃掃射をしてきて、地域の人達は橋の下に隠れたりしたそうです。民家も攻撃され、銃弾が飛んできた家もありました。